

Abstract

血友病治療の経済面

Economic aspects of haemophilia care

Louis M. Aledort

欧米諸国や日本では、政府が血友病治療にかかるコストを長期にわたり負担してきた。今日まで、米国や南米諸国、中東諸国などでは、財源の割り当てが治療法の選択を行う上で決定的な要因となってきた。技術の進歩に伴い凝固因子にかかるコストは急激に上昇し、今日では20年前の10倍に達している。これらは全治療コストの90%以上を占めている。また、輸血により伝播される疾患であるHIVやC型肝炎、およびインヒビターの出現は、さらにこれらのコストを押し上げた。

ますます多くの国々で医療コストが厳密に精査されるようになるにつれ、高コスト低頻度の疾患に注目が集まっている。したがって、ロンドンで開催された第2回年次ワークショップのテーマを、血友病の経済面としたのは当を得ていた。

今後、血友病患者への経済的支援を正当化し続けてゆくためには、血友病患者（合併症がある場合とない場合を含む）にかかる医療コストに関する知識や費用対効果の向上、長期的なコストに見合う成果

の達成、などが不可欠である。本会議では、これらのコストやQOL測定尺度、C型肝炎やHIVがもたらす影響、および新たな治療法に焦点が絞られた。免疫寛容が費用対効果にもたらす有益性やインヒビターにかかるコストの増加などが指摘された。このような討議では、終始、各国の国家財源や文化の違いを考慮に入れておかなければならない。

1999年1月11、12日、ロンドンで小規模な非公式ワークショップが開催された。このワークショップには、血友病治療の経済的側面に特に関心を寄せる医療関係者が世界各国から集まった。Meeting reportは*Haemophilia* 1999; 5: 216～219に掲載されている。今回の*Haemophilia* (Vol. 5 No. 6)に掲載されている論文は、ワークショップで発表された論文である。願わくは、血友病治療コストの国家負担を断固として守るため、医師や患者、および各国の公的機関関係者にこれらの論文を一種のテンプレートとして使っていただきたい。